

くすり一口メモ

経皮吸収型ドパミン受容体刺激薬

パーキンソン病とは、中脳黒質のドパミン産生神経細胞の減少を特徴とする運動障害疾患であり、4大運動症状として、安静時振戦、無動・寡動、筋強剛、姿勢反射障害が挙げられます。薬物治療では、レボドパ含有製剤をはじめとしてドパミン受容体刺激薬、選択的モノアミン酸化酵素 (MAO-B) 阻害薬、カテコール-Oメチルトランスフェラーゼ (COMT) 阻害薬などが用いられ、剤型は経口剤、貼付剤、注射剤、経腸用液が発売されているため患者の症状に応じて選択されています。パーキンソン病では、摂食・嚥下障害を有することで経口剤での薬物治療が不向きな患者が多く存在すると考えられるため、貼付薬はアドヒアランスの向上に加え、安定した血中濃度を保つことができるとされています。日本では、2013年に経皮吸収型ドパミン受容体刺激薬としてロチゴチン (ニュープロ®パッチ) が発売され、唯一の貼付薬として使用されてきましたが、2019年12月に同じく経皮吸収型ドパミン受容体刺激薬としてロピニロール塩酸塩 (ハルロピ®テープ) が発売されました。

そこで今回は、経皮吸収型ドパミン受容体刺激薬2剤の比較を表にまとめました。

表 経皮吸収型ドパミン受容体刺激薬

一般名	ロチゴチン	ロピニロール塩酸塩
商品名	ニュープロ®パッチ	ハルロピ®テープ
規格	2.25mg, 4.5mg, 9mg, 13.5mg, 18mg	8mg, 16mg, 24mg, 32mg, 40mg
作用機序	ドパミン受容体刺激	
適応	<p>【2.25mg, 4.5mg】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パーキンソン病</li> <li>・中等度から高度の特発性レストレスレッグス症候群 (下肢静止不能症候群)</li> </ul> <p>【9mg, 13.5mg, 18mg】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パーキンソン病</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パーキンソン病</li> </ul>
用法用量	<p>【パーキンソン病】</p> <p>1日1回4.5mgより開始。 1週間毎に1日量として4.5mgずつ増量し維持量 (標準1日量9~36mg) を定める。1日36mgを超えないこと。</p> <p>【中等度から高度の特発性レストレスレッグス症候群 (下肢静止不能症候群)】</p> <p>1日1回2.25mgより開始。 1週間以上の間隔をあけて1日量として2.25mgずつ増量し維持量 (標準1日量4.5~6.75mg) を定める。 1日6.75mgを超えないこと。</p>	<p>1日1回8mgより開始。 必要に応じて1週間以上の間隔で8mgずつ増量。1日64mgを超えないこと。</p>
貼付部位	肩、上腕部、腹部、側腹部、臀部、大腿部	胸部、腹部、側腹部、大腿部、上腕部
代謝	硫酸抱合、グルクロン酸抱合、CYP2C19、CYP1A2	CYP1A2
併用注意	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドパミン拮抗剤</li> <li>・抗パーキンソン剤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドパミン拮抗剤</li> <li>・CYP1A2阻害作用を有する薬剤</li> <li>・エストロゲン含有製剤</li> </ul>
他の剤型	なし	経口剤あり (レキップ®錠, CR錠)
禁忌	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者</li> <li>・妊婦又は妊娠している可能性のある女性</li> </ul>	
警告	前兆のない突発的睡眠及び傾眠等がみられることがあり、また、突発的睡眠により自動車事故を起こした例が報告されているので、患者に本剤の突発的睡眠及び傾眠等についてよく説明し、本剤使用中には、自動車の運転、機械の操作、高所作業等危険を伴う作業に従事させないよう注意すること。	
薬価	2.25mg:263.5円/枚, 4.5mg:405.4円/枚, 9mg:622.9円/枚, 13.5mg:801.5円/枚, 18mg:958.4円/枚	8mg:404.9円/枚, 16mg:623円/枚, 24mg:801.5円/枚, 32mg:958.4円/枚, 40mg:1101円/枚

経皮吸収型製剤に共通する副作用として、皮膚のかぶれや痒みなどの適用部位反応があり、その障害により使用継続が困難となる場合があります。保湿薬を塗布することで皮膚障害の予防や軽減が可能であるため、使用開始時には皮膚障害への対処法を指導しておく必要があります。また、両剤とも添付文書中で、前兆のない突発性睡眠や傾眠を来す可能性について警告されているため、自動車の運転、機械の操作、高所作業など危険を伴う作業に従事しないように説明が必要です。

参考文献：各社添付文書，今日の治療薬2019（南江堂），  
月刊薬事2019 Vol.61 No.11（じほう）

（鹿児島市医師会病院薬剤部 福元 裕介）

